

特集 近・現代資料と博物館活動



日野市ふるさと博物館企画展
『まちに電車がやってきた』展示風景

近年いわゆる近・現代資料が各方面で注目され、各地の博物館では近・現代資料の収集や展示が目立つようになりました。殊に20世紀最後の年にあたる平成12年には、三多摩地区でも、20世紀を検証する内容の展示を行った博物館が多く見られました。

そこで今回の『ミュージアム多摩』では、「近・現代資料と博物館活動」をテーマとして、近・現代資料に関して特色ある取り組みをしている大田区立郷土博物館の北村敏氏、松戸市立博物館の青木俊也氏にご寄稿いただくとともに、加盟各館の活動や取り組みを特集しました。

移り変わる時代の中で博物館のあり方や資料のとらえ方が改めて問われている今、それらを検証する上での手がかりになれば幸いです。

特別寄稿

チャンスを活かす 一特別展・企画展の一側面一

大田区立郷土博物館 北村 敏

大田区立郷土博物館に勤務する筆者は、昨夏『空の玄関・羽田空港70年』と題した特別展を担当した。以下、準備から会期終了までの経験と、その後の感想の一端を記してみる。なお、ここでは今まで展示の拡大活動として意識され勝ちだった特別展・企画展の別な効用も考えてみた。

企画展は情報獲得の好機 博物館は、日ごろ、沢山の仕事に囲まれている。そんな中で、開催会期の設定された企画展は、多忙を極める業務の一つではあるが、個別情報・資料の掘り起こしと蓄積・学習の絶好の機会となっている。施設・職員ごと主題の選択や意義付けに幅はあるが、普段から関心を持ちつつも集中しにくい対象を、意識的に捉え直す好機であることに間違いはない。ことに事件性や話題性の少ない近代事象や現在進行形の日常は、意識的にならない限り展示や記録化に耐え得るかも見定め難い、こんな事象が格好の題材にもなるのである。

間口は広いが、検証の糸口として 今回対象とした羽田空港は1931(昭和6)年、国の旅客専用の「東京飛行場」として開港する。以来70年、

今日では、敷地1,271ha、1日360余便(720離発着)、年間5,400万人の利用客と60数万トンの航空貨物を扱う、巨大な空の玄関となっている。区内の一面を占める巨大施設の歴史への興味、現在の状況への関心、将来を含め空港施設を地域内に持った意味、など展示会の話題性は充分である。むしろ、限られた時間・予算・処理能力を思うと、対象の奥行きの高さと間口の広さに危惧さえ覚えた。しかし、博物館として、過去も未来も検証したい地域施設として、その糸口ができればと取り組んだ。

まず、羽田空港の歴史的な事前学習によって、空港前史、昭和初期、戦争中および連合軍接收時代、国際線国内線併用時代、1984年から始まる空港沖合展開事業、新旧ターミナルビル・空港の仕事と航空会社、今日の東京国際空港の諸問題(騒音公害・沖合移転に伴う跡地利用・国際線枠の拡大)、などを章立てし、これを軸に関係する個人や団体に情報・資料を求めていった。

資料の掘り起こしと価値の発見・創造 どの時代や主題を対象としても、変わりはないとは

いえ、時間差の大きな歴史事象と比較し、近現代事象は評価の未定着なままに素材が出現する。また、関係者の豊富さゆえに、多くの未知な情報・資料も集まる。これら未評価で複雑に錯綜する素材の中から、主題に沿う有効なものを選び出し、展示資料としてそのまま、あるいは加工して組み立てていく。素材に軽重の差はあっても無意味な物はほとんど無い。あまりの身近さに提供者自身が、資料の持つ意味に気づいていない時さえある。見方や見せ方により、変哲の無い素材でも、主題に迫る強烈な資料となる。

例えば、現在の空港ビル＝ビックバード内で気軽に配布されているフロア案内図を広げてみる。すると、発着ロビーの他、催事スペースを中心に土産物店、服飾装身具中心のデパート・ブティック、そしてレストランと並ぶ。このフロア構成は1日15万人が行き交う空港が、全国への商業発信・販売促進の最先端の場でもあることを如実に語るものである。一方、その横に日本土産・東京土産・免税店の紹介された30年前の国際線・国内線併用期の案内チラシを並べると、空港ビルのフロアを介して羽田空港の役割変化を雄弁に語る資料となる。ごく日常的なチラシの1枚だが、歴史性・伝統性・優品性・稀少性という既成の価値観だけでは計れない多くの価値が潜んでいる。

歴史的評価が未定着な素材や情報に対し、新たな意味を発見していく。そこでは、主題に肉迫する醍醐味を味わいつつ、展示や資料収集行為に内在している恣意性や思弁としての政治性を自覚せざるを得ない場面でもある。

展示はしばしば評価の流動的な今日的な話題、あるいは利害や主義主張を伴う事象にも直面する。この場合、得てして扱いそのものに及び腰となる。人権に配慮しつつ可能な範囲で多くの情報・資料を開示し、検討の糸口とする姿勢も必要となる。

84年から始まった羽田空港の沖合展開事業は、ほぼ3年後の完工を控えて旧空港用地内に200haの跡地を生み出している。その利用を巡って既に10年来、国・都・地元区・民間からさまざまに分割利用案が出され、綱引き状態にある。また24時間空港化・国際便発着数の拡大なども、まさに現在進行形の検討事項とされていた。これらには、それぞれの立場の資料をできるだけ多く用意すると同時に、報道記事に潜む新聞社の論調があると承知した上で、時々刻々の最新情報として1年間の新聞スクラップを提示し、検討の素材とした。地域を見直す話題の材料としたかったわけである。

時間との戦いの中で ところで開催会期の設定された展示会は時間との戦いでもある。集め

た素材を使って、どのように説明し、伝えるか。その構成に担当者は知恵を絞る。幸いにして専門家の援助が得られたとしても、資料への意味付けは企画者が主体性を保持していきたい。

展示を興味深く見せるには、①展示資料それ自体に絶対的な面白さ・価値・力強さがあること。つまり説明抜きで、そこに優品性・稀少性・歴史性・話題性などのオーラが備わっていること。②それ自体にはあまり迫力が無い素材でも意味付けや組み合わせによって、資料としての新たな意味や力が生じてくるもの。ここでは資料の解釈の斬新さと、展示造作上の工夫も併せて求められる。すなわち、見せ方・語り方の工夫である。③展示場で来館者が自発的かつ連続的に理解する快感が得られること。理解の快感こそ見学の原動力であるからだ。

展示会では、この三点を念頭にしつつも結果はなかなか満足が行かない。観覧者の知識・興味は多様である。資料や説明の多寡の受容はまちまちで、消化不良と物足りなさを同居させる。一筋縄では行かないのが展示である。今回は、時間切れもあり、素材の物珍しさやオーラに依存し、丁寧な解説を端折る乱暴な会場作りをしてしまった。計画の内幕を知らなければ、展示はそれでも仕上がっているように見えてしまうから恐ろしい。

一過性の展示会場に対し、展示会図録は、その成果を今後引き継ぐ資料の所在目録と索引の役割を持つ。読み物や写真集としての面白さと同時に、展示会で得た資料情報が、後になっても、また、第三者にでも充分活用できるよう配慮すべきである。ただ、読み物としての体裁を確保するのがやっとなことが多く、今回もまた反省する結果となってしまった。

展示会は資料を撤去し返却・収納し終了する。しかし、情報の集積と継続活動を重視するなら、展示会を機に得た膨大な物・事・人の情報をいかに検索・閲覧などの再利用に耐え得る博物館の財産資料として行くのか、資料化は重要な職



ボーイング737-200機の子車輪、壁には首都圏航空図を掲示

責の一つとなる。展示会の仕立て方と後始末の方法は館ごとに違いは有ろうが属人化に留めず組織的共有化にも努めたい。

近現代資料をどう集めるか 近現代の事象と事物はその近時性から、何が資料となるのか見極め難い。そこで、今まで博物館資料として漏れ勝ちであった量産工業製品や地域変遷図などを精力的にリスト化しよう、という工夫が提唱され出している。リスト作りによる収集対象の意識化は、定点・定期の観測や収集と同様有効な収積の手段である。手をこまねいて気づいた時には何も無い。その無策を悔やむよりは大いに建設的だ。リストの幅を広げ密度を高める研究は評価されるし、怠ってはならない。しかし、不変の価値観が構築され、あるいは流れる時間を止めない限り、今日の価値観によるリストの整備はいずれ将来不備となることも含んでいる。すなわち、時間が生み出す安定的な評価と稀少性に依拠しにくい流動可変な近現代の事象に、規格性を強め、対象事項を肥大化させた資料リストをいくら引き当てても、いずれは齟齬が生じてしまう。リスト化に依拠した資料収集には常に、この陥穽があることの自覚も忘れてはならない。

では、近現代資料に位置付けを与えつつ、集めていく方法が他にあるのだろうか。そこで提唱するのが、主題を介した近現代の企画展を資料収集の契機とすることである。企画展は、強い主題に基づく事象・事物の情報資料の切り取りである。当然ながら企画者の意思・判断を経た物語性を帯びた資料が集まり並ぶ、その恣意性は先に記したとおりである。むしろ、その自覚に基づく資料の一群こそが、自ずと読み解いた近現代社会を、如実に物語る素材となっていくのではなかろうか。

資料収集とは、どんなに科学性に基づいても、あるいは中立性を装っても、時代の価値観から

逃れられない本質的宿命を帯びたもの、と考えざるを得ないからである。

近現代分野をはじめ、どの分野の収集対象のリスト化を否定はしない。しかし、それらが対象分野への、一つの方便としての機能でしかないことにも、気づいておきたい。

地域博物館の可能性 個々の地域博物館には、得意とする分野・弱点分野などがさまざまにあるであろう。しかし、地域の内と外に関わる過去・現在・未来のあらゆる文化・自然現象に対し、自在に応じた地域観と資料観を拠り所として、活動するなら、地域博物館は全方位の情報収積機関として、またとない経験学習機関、あるいは地域意識や認識の確認と創造の拠点となるのではなかろうか。

そのためには、博物館を取り巻く個別科学は主役ではなく、むしろ地域を考察する際の有効な補助線としての役割を持つものと考えたい。そしてまた、長らく博物館が好んで権威主義的・術学的に依存してきた既成の価値観や学問意識の桎梏から積極的に脱し、捉われない地域への鋭い感覚と検証意識に新たに委ねること。この思考回路こそが、豊かな可能性を持つ地域博物館活動を育てる原動力となるように思う。



「航研機」1/5スケールモデル。羽田で実験を繰り返したのち昭和13年に周回長距離飛行世界記録を達成した。模型だが両翼幅5.6mある。

特別寄稿

企画展「戦後松戸の生活革新」における現代生活資料の展示表現

松戸市立博物館 青木俊也

はじめに

松戸市立博物館では、昨年10月7日から11月26日まで企画展「戦後松戸の生活革新～新しい暮らし方へのあこがれ～」を開催した。戦後の松戸市域が東京近郊の農村地域から首都圏の住宅地として大きく変貌したなかで、市域の人々はどのような暮らしを送ったのかが、テーマであった。

この企画展の主な展示資料となった昭和30年代当時のテレビ・冷蔵庫・洗濯機に代表される高度経済成長期に急速に普及した電化製品などの大量生産・大量消費された戦後の生活資料は、歴史系の博物館において収集し、展示する機会が増えつつある。

それらとは別に、美術館における工業デザインの視点による、収集、展示、国立科学博物館

による「産業技術史資料の評価・保存・公開等に関する調査研究」などが行われている。そのような状況のなかで、歴史系の地域博物館の戦後生活資料の収集、展示の意味について、この展示を企画段階から開催までを通して考えたことを記してみたい。

1. 常設展示・常盤平団地2DKの生活資料

さて、「戦後松戸の生活革新」に先だって、当博物館では戦後の市域の急激な住宅地化の象徴として、日本住宅公団による市域の最も早い大規模な宅地開発によって建設された常盤平団地(4,839戸)の公団住宅、2DKを原寸大で復元し、入居開始(昭和35年~37年)当初の居住者の生活を常設展示室に再現している。展示した2DKは、ダイニングキッチンと2和室(寝室)の間取りの浴室(ガス風呂)、水洗トイレ、ステンレススチールの流しなど同時の最新の設備が備わった約13坪の住宅であった。住宅の復元は、住宅都市整備公団の協力によって厳密に進められた。

その一方で、公団保管の「常盤平団地入居者調査資料」と実際の入居者家族の生活の聞き取り調査から「東京の中心部に勤めるサラリーマンで、昭和35年に夫婦で入居し、その後1児を設けた」家族像を設定し、その家族像に沿った家族のシナリオのもとに、その生活を再現した。当時の一般的に団地居住者は団地族と呼ばれ、生活革命と呼ばれた当時の急激な生活の変化を先取りした生活をおくっていたことが昭和35年版『国民生活白書』でも指摘され、常盤平団地の初期入居者への生活調査とも付合していた。その結果、急速に普及した電化製品などが取り揃え、ダイニングテーブルなどの椅子式の生活を実現した豊かな明るい生活として展示した。このような意図で展示した資料は、総体として常盤平団地居住者の生活を表現することになった。

2. 企画展「戦後松戸の生活革新」・常盤平団地2DK生活資料

しかし、団地居住者の生活再現資料という総体としての意味を持ったそれらの資料は、それぞれが切り離されたときの博物館資料としての位置づけをどのように考えるのかという課題が残された。基本的には、個別な資料が購入された動機、経緯、使用状況などを細かく追っていくことから始めなければならないだろう。ただし、今回「戦後松戸の生活革新」での展示資料として、より博物館資料として、現代生活資料が位置づけることを試みた。具体的には、常設展示と同様の手法で常盤平団地の2DKの生活再現おこなうなかでそれぞれの生活資料が、どのように使われ始めたのかなどの情報を展示した。具体的には、昭和35年に常盤平団地の2DK住宅に入居したある報道機関のカメラマンが撮られた膨大な家族写真、およそ6,700カット(昭和35年~41年)から、2DKの生活の変化を間取り図に復元し、それに表す代表的な写真を展示した(写真1. 2参照)。例えば、当初は食卓として卓袱台を使っていたのが、入居から1年後にはダイニングテーブルに変わったこと、テレビ、冷蔵庫などの電化製品が購入された時期などを明らかにして、展示した。これらの家族写真によって、高度経済成長期に急速に普及した電化製品などの資料に人とのつながりが展示に表現されたと考えている。少なくとも、当博物館の現代生活資料に、より豊かな意味を加える手始めになったといえる。

また、この企画展での写真資料を使った2DKの生活再現は、常設展示の2DKの生活再現のリニューアルのための試作と位置づけており、今後に生かす計画を進めている。

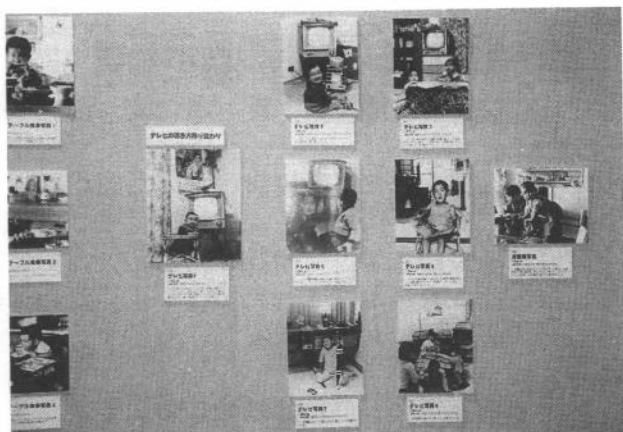


写真1



写真2

近・現代資料の扱いについての館としての方針という程のものもありませんので、何となく任されてしまうことが少なくない民俗担当の雑感として以下を記してみたいと思います。

* * *

近・現代資料といっても様々あるわけですが、ここでは概ね昭和40年代前後頃に使われていた生活用具を中心に考えてみましょう。東京オリンピックの頃（1964）、電化も進み手回し式チャンネルのテレビやハンドル手絞り器の洗濯機など大量生産された製品が普及した頃。近年この類を展示した展覧会が各地の地域博物館で開かれ、随分と好評を得ているようです。実際、私自身もこうした展示を見、往時の暮らしぶりを懐かしく思い出したり、また生活の変化というものを考えさせられたりします。

今から25年程前のこと、三多摩の博物館の民俗担当の学芸員有志が集まり西多摩郡の檜原村で民俗調査をしたことがあります。檜原では古

くは道が山の尾根伝いに発達し、旧家と呼ばれる家の多くは山の高处にあります。つまり、今となっては不便な所になるわけです。そうした旧家の50代の主婦から聞き書きをした折、目に付いたのが台所の真っ白な冷蔵庫。その主婦は冷蔵庫が欲しくて欲しくてしょうがなかったというのですが、自動車道から家まで運んでくれる人がいなく、仕方なく背負子（しょいこ）を使って3日かかりで自分で担ぎ上げた、というのです。山村の暮らしぶりを彷彿させる話に甚く感激したものでした。

今現在何気なく使っているものも、やがて過去を示す資料となります。地域性のない大量生産されたものでも、それを使った地域の人々にとっては、立派にその地域の暮らしぶりを表わすものになるわけです。と、ここまでは理屈でも分かるのですが、満杯となってしまった収蔵庫を眺めわたした時に、はてどうしたものかと考え込んでしまう今日この頃、というのが実感。

号外に見る戦争 ～平和のための戦争資料展～

福生市郷土資料室

平成12年、福生市は市制30周年を、そして福生市郷土資料室は開設20周年を迎えました。そこで、これらを記念し、例年1回開催の特別展を、今年度は5回開催しました。ここでは、その特別展のうち、夏季に開催した「号外に見る戦争～平和のための戦争資料展～」について紹介します。

これまで当資料室では、毎年夏の太平洋戦争終戦の時期に合わせて、戦争資料展を企画してきました。今回は、この企画を特別展示とし、『大阪朝日新聞』を中心に約800点におよぶ号外を展示しました。これらの号外は、市民の方から平成11年度に寄託を受けたもので、昭和7年（1932）から昭和15年にかけて収集された資料です。

号外は、当時の政治や世相から文化やスポーツまで、あらゆるジャンルのトピックを現在に伝えてくれる貴重な資料といえます。なかには、1日に4回も号外を発行した日もあり、現在とちがって、テレビ等のメディアが普及していなかった事情がうかがえます。新聞や号外が、新しい情報を人びとが得るための中心となる重要なものだったといえるでしょう。

また福生市には、旧日本陸軍の多摩飛行場（現・米軍横田基地）がありました。そのため、福生の近代の歩みは、戦争の歴史と密接な関係

があります。新しい世紀を迎えた現在、これまでの歴史を正しく認識し、こうした戦争資料を収集、展示していくことで、福生の歴史を現代に伝えとともに、可能性のある未来にむけて、私たちがどう生きていくのかの参考となる指針になればと考えています。戦争の記憶が薄れていくなかで、この展示が若い世代の人たちにも戦争、そして平和について思いをめぐらす具体的なきっかけとなれば幸いです。

こういった考えから、福生市郷土資料室では、旧日本陸軍多摩飛行場に関連のある近代資料の収集も、今後考えていきたいと思っています。



約800点におよぶ号外を展示

「開発」をキーワードとした近現代史展示の試み

パルテノン多摩歴史ミュージアム

パルテノン多摩歴史ミュージアムは、平成12年3月15日にリニューアルオープンした。それ以前の常設展は「多摩の自然とくらし」というテーマで、いわゆる多摩市の歴史（通史）と民俗を主題としたものであったが、リニューアルに際して大幅に修正を加え、「多摩丘陵の開発」を展示テーマとして、「開発」をキーワードに多摩丘陵のあゆみをたどるというスタンスを取ることとした。

リニューアルを経てもっとも変わったことは、常設展の中で近現代史の占める割合が飛躍的に大きくなったということである。展示は、①多摩丘陵の開発のはじまり、②近代化と多摩丘陵、③多摩ニュータウンの誕生、④変わりゆく多摩ニュータウン、という4つのコーナーからなっており、全体の4分の3がいわゆる近現代史の展示になっている。さらに、③と④のコーナーを昭和30年代後半以降の多摩ニュータウン開発の経緯に充てており、「多摩ニュータウン」に特化した展示であるといっていよい。

これは、市域の6割を多摩ニュータウン区域が占めているという多摩市特有の事情に加え、パルテノン多摩自体が多摩ニュータウンの中心

部・多摩センター地区に立地しているという地域特性を考慮したすえの判断に基づいている。その結果、近現代史を基調とした展示で構成されることとなったわけである。

展示にあたっては、多摩ニュータウン開発にかかわる政治的なプロセスを、地域社会との関係を軸にして歴史的にとらえなおすことを目指した。多摩ニュータウンは、政府・東京都・日本住宅公団（現在の都市基盤整備公団）といった政治的な要因が深く関わっている。こうした政策的な経過を踏まえつつ、ニュータウン計画を受け入れざるを得なかった地域がどのような対応をしたのかといったことを、もう一つの重要な柱として展示に盛り込んだ。

しかし、「政治的なプロセス」を重視するあまり、行政資料あるいは政策決定に関する資料が多く、そこに住む人々の生活のようすを伝える資料が手薄になってしまったという反省が残った。今後は、多摩ニュータウンの生活に関わる資料の収集を続け、よりリアルな多摩ニュータウンの歴史を提示していくことができるよう心がけていきたい。

近・現代史を語る小さな資料

府中市郷土の森博物館

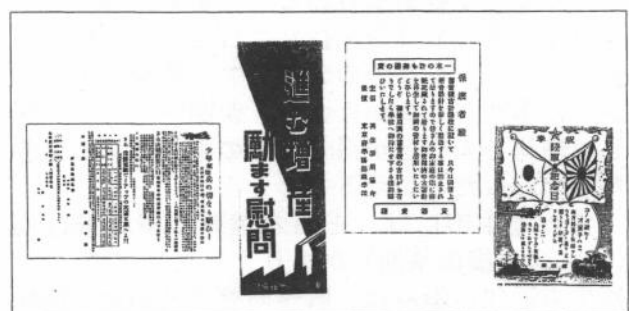
ごく小さな資料が大きな歴史を語り、地域の人たちの身近な生活資料が、時代の重要な証言者となる。そんなことはしばしばある。近・現代史の、なかでも重大な節目である太平洋戦争期のもので、特にこのことを感じる資料群に、最近立ち会うことがあったので、触れてみる。

郷土の森復原建築物のひとつに旧府中尋常高等小学校校舎があり、教育資料館的な機能を持たせているので、教育資料収集には重点を置いてきた。近代教科書のサンプル収集でなく地域の視点を、ということ、膨大な教科書類の署名・落書や挟まっていた紙片に注目した。後者についてもたくさん見つかった。当時の教室で配布され家庭に持ち帰られるところを、そのまま忘れられたかどうかして、偶然伝えられたものである。数々の粗末な紙切れには「保護者殿 蓄音機古針回収に就いて・一本の針も御国の宝」「奉祝陸軍記念日・コノオ祝ヒノオ菓子ハ!!」「少年航空兵の切なる願ひ！大詔奉戴日の朝、校長先生の感激の訓話」「サァ二年目も勝ち抜くぞ！」など。いずれも子供たちや家庭の戦意高揚を目的に教室の外から持ち込まれたもので

ある。その時代、国定教科書自体ご存知の内容なので致し方ないのかもしれないが、教育の自主性・自立性といった問題を考えざるを得ない。

いまひとつは、中国出兵軍人のご子息から寄贈された守札群である。その数61枚。村の鎮守様から全国の有名神社のものまでが含まれている。「武運長久」「砲弾除霊符」「身代わり不動」などなど。愛国婦人会や青年団など入手経路までメモ書きされている。戦争用お守りの種類や信仰圏の問題、それから地域社会における神社の役割など。これもいろいろ考えさせる。

もっとも、収集後の活用が博物館としての将来に渉る課題であるが。



企画展「まちづくり奮戦記—くにたち文教地区 指定とその後—」への取り組み

くにたち郷土文化館

当館では、現代史を扱った企画展「まちづくり奮戦記—くにたち文教地区 指定とその後—」(会期/2000.10.21~12.24)を開催した。本展示は、「文教都市」として市内外に知られる国立が、どういう経緯で文教地区指定を受け、まちづくりを進めてきたのかを資料によって振り返り、これからどのようなまちにしていくか考える手がかりにするという意図で企画した。

国立の文教地区指定は住民運動の結果を受けたもので、1952(昭和27)年の指定からすでに半世紀近く過ぎ、指定をめぐる住民間で大きな論争が起きたという事実がだんだん風化しているのが現状である。そこで、そうした歴史をしっかりと記録し、「文教都市くにたち」とうたわれるまちの実態を今一度認識し直すことができると考え、関係者への聞き取りや住宅地としての現状なども取り入れて構成した。展示を見て、「反対意見があったとは知らなかった」といった感想を聞くことが多く、50年前の出来事といえども、歴史事実としてきちんと取り上げていく必要があるのだ、と実感できた。

資料収集の過程で、当時の資料がほとんど残っていないことが分かり、展示資料は個人的に保

存されていた一括の資料に頼るほかなかった。当時の紙は質が悪く劣化しやすいため、保存が難しいということもあるが、現代の資料を残していくことの難しさを痛感した。そういった「新しい時代」の資料もまた、博物館が責任を持って収集、保存に取り組んでいなくては、ほんの数十年で散逸、消滅してしまうという事実を突きつけられたようでもあった。

当館では、大正末期の「学園都市」構想に基づく宅地開発の経緯を振り返る企画展や、喫茶店を中心に商店街の歩みを追う企画展など、「近現代」をテーマとした展示を何度か開催してきた。国立市の歴史における近現代の歩みはかなり独特のものであり、現在の市の個性が作られた要因として大きな位置を占めている。今後も継続して、調査・研究・資料収集を進めていくのが、当館の使命と考えている。



展示資料の一部

企画展「まちに電車がやってきた—京王線と日野市の軌跡—」の開催

日野市ふるさと博物館

当館では平成12年夏に『まちに電車がやってきた—京王線と日野市の軌跡—』という企画展を開催し、市内を走る京王線とのかかわりの上から旧七生村地域(日野市域南部にあたる)の近・現代史を検証する展示を行った。

各地の博物館で開催される鉄道を題材とした企画展は概して好評で多くの入館者を記録していると聞かすが、今回の企画展の主題はあくまで旧七生村地域の近・現代史であって、京王線はそれを検証して行くうえでの軸として据えたものであった。

日本のいわゆる大手私鉄は単に交通機関としてのみでなく、沿線の宅地開発、観光開発などを行い、さらに多角的な企業グループを構成し、沿線住民の日常生活と深くかかわっている場合が多い。このため、地域の近・現代史はそこを走る私鉄の動向に左右される部分が大きく、展示にあたっては地域の変遷をとらえる手立てとして有効なのではないかと推測された。

京王線と旧七生村地域のかかわり而言えば、京王電鉄は昭和30年代を境に、旧七生村地域の位置付けを大きく変えている。高幡不動や百草

園などが立地する旧七生村は、玉南鉄道(京王線府中—京王八王子間の前身)の開通時から沿線を代表する行楽地として位置付けられ、電鉄は高幡不動の門前に繁華街を作り、ハイキングコースや公園を整備し、戦後には多摩動物公園を誘致するなど積極的な活動をしてきた。しかしその後の日野市域が都市化の波に飲み込まれると、京王電鉄自身もさきのハイキングコースに隣接して大規模な宅地開発を行うなど、この地域を東京の典型的なベッドタウンとして位置付けて企業活動を行い、現在に至っている。

今回の企画展では、このような京王電鉄による旧七生村地域の位置付けとそれに伴う企業活動の展開を軸に据えることで、旧七生村地域が辿った変貌の足跡を、より明確な形で表現できたと思っている。また地域の住民が日常的に利用する京王線を中心に据えただけに、観覧者にとって展示の内容が身近な問題として感じていただけたのではないかと感触を得ている。

最後に、今回の企画展の開催にあたりご協力を賜った京王電鉄をはじめとする各位に、この場を借りて謝意を表したい。

近・現代資料の充実に向けて

調布市郷土博物館

調布市郷土博物館では、昭和49年の開館以来、調布にかかわりのある資料を収集してきました。平成12年12月31日現在の資料総数は10,432点で、その内訳は考古資料が976点、歴史資料2,436点、民俗資料4,416点、自然その他の資料2,308点、美術資料が296点です。資料総数の22.1%を占める自然その他の資料には、鳥類の剥製・化石や鉱物の標本のほか、多くの近・現代資料が含まれています。近・現代資料は、衣食住などの暮らしや教養・娯楽、産業などに細分することができますが、現在のところは一括で「その他の資料」として登録しています。

しかし、資料の収集が進むにつれて、開館当初にはそれほどまとまっていなかった近・現代資料の存在が大きくなってきました。当館では、おおむね手作りによるものを民俗資料として分類し、それ以外の実物資料については、機械生産によるものはその他の資料としています。しかし、資料分類上の不都合も生じるようになっ

てきました。たとえば、ハウロウ製の煙草商の看板は民俗資料で、その店で使っていた帳簿はその他の資料に分類されるなど、本来は同時に使用されていた資料が分類上は別々の登録になっています。

また、近年では多摩川原橋の欄干の装飾板や京王線のレールなどを交通の発達を語る資料として収集しましたが、これらは開館当時には収集することになろうとは思わなかった資料です。

博物館の開館から四半世紀が過ぎ、市民からの資料寄贈の申し出は年々減少する傾向にあります。しかし、人びとの暮らしが豊かになるにつれて、各家庭には多くのものがあふれるようになりましたが、そのような暮らしを物語る近・現代資料の収集は、緒についたばかりといった状況です。今後は、近・現代を中心とした企画展の開催に向けて、資料の収集を充実させたいと考えています。

企画展「今から100年前の青梅」

青梅市郷土博物館

西暦2001年に当たる平成13年は、21世紀を迎える最初の年であります。

今から約100年前の青梅市域ではどのような出来事があったのであろうか。

明治4年(1871)廃藩置県という行政上の大変革により、武蔵国多摩郡と呼ばれていたこの地域は神奈川県に属するようになりました。

明治12年(1879)多摩郡は東西南北の四郡に分割され、東多摩郡だけが東京府に編入されますが、西多摩、南多摩、北多摩の3郡は神奈川県のみままでした。このころから『三多摩』の呼び名が生まれたようです。そして、青梅市域は金剛寺内に設けられた西多摩郡役場の管轄下に置かれました。

明治21年(1888)に市町村制が施行され、翌年1町36村だった青梅市域は青梅町、調布村、霞村、吉野村、三田村、小曾木村、成木村の7町村に編成され、明治26年(1893)には東京府に編入されました。

この頃、ようやく日本は経済的にも文化的にも近代化が進み、この地域も新しい動きが活発化します。

明治27年(1894)青梅鉄道が開通し、明治34年(1901)には中武馬車鉄道が開業するなど、交通

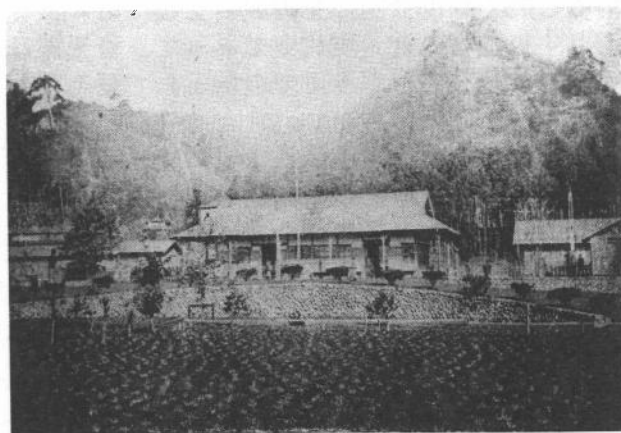
機関の整備が進みます。

明治33年(1900)には現青梅市立第一小学校で第1回西多摩郡物産共進会が開催されました。

金融面でも明治15年創業の青梅銀行に続き明治30年には多摩銀行、34年には成木銀行が創設されます。

このように今から1世紀前、青梅は既に西多摩地域における政治、経済、文化の中心的役割を担う町に成長していたのです。

本展では、100年前のこうした動きに関する資料を中心に展示し、4月29日まで開催します。



開通当初の旧青梅駅

本市は戦後、純農村から住宅都市へと大きく変貌しましたが、都市化の進行とともに農機具をはじめ生活用具の散逸が著しく、昭和51年に市民を中心に「小金井郷土資料保存会」を結成し、約10年にわたって資料収集を行ってきました。本館ではその後の収集品も含め約2,000件の民具資料を収蔵しています。これらの資料は常設展示の他、隔年に実施している民具展に活用しており、本年度は「麦作と農具」をテーマに企画展を開催しました。麦作の作業工程順に農機具を配列し、当時の作業風景等写真を使って分かり易く説明するとともに、直接道具に触れられる展示をしたところ、大変好評でした。

文書資料は、昭和30～40年代の市誌編纂事業で収集されたものを引継ぎ、現在約2,800点を収蔵しています。近世の古文書をはじめ近代の公文書・私文書・図書等多岐にわたっています。活用面では、保管文書の筆写及び資料集の発行を継続的に実施しており、これまでに「小金井市誌編纂資料」として40冊を発行しました。また、今年度から文書目録の再整理（委託事業）

にも着手しています。文書資料は展示資料としては比較的活用しにくいものですが、昨年度から始めた古文書講座では身近な地域史料として積極的に利用しています。また、家文書の中には近世～近代の往来物や教科書、証書類等教育関係資料も多く含まれており、今後、地域の教育史に関する企画展も視野に入れていこうと考えています。

玉川上水の小金井堤は、江戸・東京近郊の桜の名所として賑わい、近世～近代の紀行文・絵画・古写真・絵葉書等の資料が多数残されています。本館ではこれまで、関係資料の収集とデータベース化に取り組むとともに、平成6年度から花期に「玉川上水と名勝小金井桜」展を開催しており、当館の恒例事業になっています。

また、本館の前身である浴恩館は、昭和戦前期に全国の青年団運動の一拠点であった青年団講習所として開設され、多摩地域の青年団活動に果たした役割も大きなものがありました。今後、浴恩館を中心とした青年団関係資料の収集や展示にも取り組んでいこうと考えています。

平成12年度特別展「農村の挑戦 それは蚕からはじまった」を振り返って

羽村市郷土博物館

当館では、平成12年度特別展として、近現代の資料を扱った展示を実施しました。開催の概要は次の通りです。

タイトル 「農村の挑戦

それは蚕からはじまった」

会 期 平成12年10月11日（日）

～12月10日（日）（53日間）

会 場 羽村市郷土博物館

会期中総入館者数 9,374名

テーマは、20世紀最後の年に、羽村の100年の歩みを振り返る目的で、基盤となった農業にスポットを当てました。この100年の羽村は、養蚕業の隆盛にはじまって、昭和の大恐慌から第2次世界大戦を経て、首都圏整備法の指定を受けた新しい町づくりへと変貌する激動の時代でした。まさに農村の挑戦だったのです。

展示構成については、100年の歩みをおよそ4期に分け、「養蚕の興隆」「養蚕の衰退」「新しい農業を目指して」「首都圏整備法と農業の変化」という中タイトルを設定しました。そして、それぞれの担当者を決め、資料調査にあたりました。

資料調査にあたっては、文献調査のほかに、

聞き取り調査も精力的に実施しました。特に戦後から昭和時代にかけて話は、まだ現役の農業経営者や、当時の行政担当者から体験談を伺うことができ、非常に有益でした。

展示資料については、養蚕や畜産関係の資料に関しては、当館の収蔵資料が充実し、借用の手続きも順調であったためさほど苦勞することはありませんでしたが、首都圏整備法の指定以降の資料はモノがなく、行政文書と地図などのパネルのみで、担当者は頭を痛めました。また、文書担当の市役所庶務課、農業担当の経済課などとの調整も必要で、大変苦勞しました。

特別展では、関連事業として足踏み式の操糸機から糸を取る体験学習や、昭和30年代からの農業について、市民の方々に語り合っていたべく座談会も開催しました。

近現代の資料は、情報の裏付けを得ることが容易であるというメリットがある反面、その情報が生々しすぎ、活用が難しいことも儘あります。資料は活用されなければ死蔵も同然ですから、切り口によって活かす方法を考えていかなければなりません。

近現代資料と博物館活動

立川市歴史民俗資料館

昭和から平成に代わって12年が過ぎ、「昭和」はしだいに過去の時代として認識され始めているのではないだろうか。

90年代の終わり頃から、「昭和」をテーマとした展示が目立ちはじめ、それに伴って近現代資料が扱われる機会が増えていると感じられる。

当館では平成11年11月の企画展「暖」、平成12年8月の企画展「くらしの道具の移り変わり」で近現代資料を取り扱った。

「暖」では、「こたつ」や「ストーブ」「あんか」といった暖房器具を種類別に時系列で比較できるように展示した。

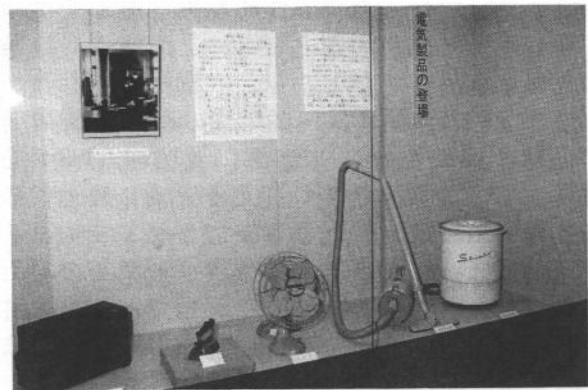
「くらしの道具の移り変わり」では、たらい、洗濯板と電気洗濯機、団扇と扇風機、お釜と電気炊飯器など、身近な道具が時代と共に移り変わっていった様子を展示した。

小学生でも理解できる展示を心掛けた。開催中に実施したアンケート調査でも、分かり易かったといった意見が多く、いずれの展示も好評であったと認識している。

近現代資料といえば、一般的には明治時代以降の資料といわれている。このうち、戦後になっ

てからの資料、いわゆる現代資料をどう扱うかがよく問題になるが、当館ではできるだけ資料として保管する方向で収集している。

現代資料の収集については、当館にも疑問の声が寄せられることもあるが、いずれは、その時代その地域の生活を示す資料となると考えている。収集スペースの問題等で断念せざるを得ないこともあるが、なるべく、集められる時に集めておき、今後の館活動に活用していきたいと考えている。



企画展「くらしの道具の移り変わり」

企画展「近世庶民文化の開花—村人の芸と技—」について

東村山ふるさと歴史館

開 期：平成12年6月20日～7月23日

現在、私たちが親しんでいるような祭礼や芸能、あるいは俳諧・生け花などの文化に庶民が親しむようになったのは一般的に江戸時代になってからといわれます。しかしいままではその実態も明らかでなく、江戸期の在村文化を総括的に扱った地域博物館の展示は少なかったように思います。

東村山市においても然りでありましたが、特に市史編さん事業の文書調査により、そういった文化的な資料の所在が資料を細かく見ていくと江戸後期から幕末にかけて十数点明らかになりました。またそれに市内外に残る伝承や遺物により芸能等記録に残らないものについても網羅し、いちおうその時代の在村文化の総括的展示を目指したのがこの企画展でした。

主な文芸関係資料は市内野口村の俳人其牛が関係した『むさしの三歌仙』『狭山三十二所観世音順礼記』の紹介。幕末の俳諧サークル市内大袋村「大袋連」の俳句関係資料。多摩地域の生け花の流行を示す『允中插花鏡』。などの文芸資料などです。

芸能関係資料では、まず市内南秋津の神楽師

熊川家（廃絶）で使われていたと考えられる神楽面を三芳町の神楽師の前田家から借用し、またそれに用いる楽器類も合わせて展示。また熊川家では神楽のほかにも「写し絵」や「説教浄瑠璃」を手がけていた記録があるので、「写し絵」の種板や「説教浄瑠璃」の見台や台本、また幕末期に流行した座敷浄瑠璃（儀太夫）の案内状などについても展示しました。

また若者の芸能として江戸後期から昭和初期まで市内数か所で行われていたものの現在全く忘れられている「双盤念仏」の鉦・太鼓や奉納額を展示し解説をくわえました。

あわせて江戸後期に野口や大袋で活躍した「宮大工」についての展示も加えました。

企画展講演会として7月8日に視聴覚室で、東京都指定無形文化財保持者説教浄瑠璃三世若松若太夫師に「語り物の系譜」のお話、それに続いて「さんしょう太夫」の熱演をいただきました。当日は70名近い市民が聴講し盛会でした。

今後各地域の博物館で積極的に近現代も視野に入れた「在村文化」の企画を取り上げていただきたいと思います。

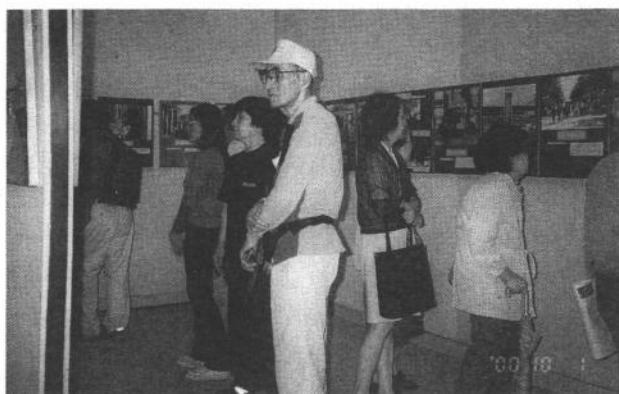
平成12年度は清瀬市が市制施行30周年を迎えたこともあり、記念事業の一環として「清瀬のあゆみ写真展 一人がいて暮らしがある、まちがある一」を実施した。展示資料は館の収集写真、市の秘書広報課が昭和36年頃から取材してきた写真、展覧会実施にあたり市民から新たに提供を受けた写真など246点で構成した。

当市は近隣市の例に洩れず昭和20年代後半から住宅都市として急速な人口増をみ、戦後の昭和史と同調して生活様式も大きく変容していったのだが、特に広報課の写真はこの流れを如実にあらわしており興味深い。蛇足だが現在の清瀬の姿と比較すると、いわゆる素人たちが撮影した平凡な写真であるのかかわらず昭和40年代頃までは風景、建物、人のすべてが温かみのある調和のとれた世界を形成しているように思えた。

昭和30年代半ば以前の資料に関しては個人蔵の写真が頼りになるが、開館時に集中的に集めた資料と、僅かずつではあるが継続して収集してきた資料が活躍した。「古い写真などない」と言う家でも必ず一枚は価値のある写真が眠っているというのが今までに得た実感だ。未調査

の家が数多くあるので今後新資料発見の期待も大きい。それについても館の物理的制約上調査が進まない中、変化の激しい昨今は一年の遅れが取り返しのつかないことのように思えてならない。

今回は展覧会図録を作成しなかったが予想以上に市民の反響があったため、可能であれば低コストでCD-ROM化するなどして出版したい。また、膨大な数にのぼる写真資料をコンピュータに記録、検索システムを導入し利用者に情報提供していきたいと考えている。



『多摩のあゆみ』第100号一特集・二〇世紀の多摩一の発行

(財)たましん地域文化財団

当財団発行の季刊誌『多摩のあゆみ』が、昨年11月15日の発行で第100号を迎えました。今号の特集は、20世紀100年の間に私たちの暮らす多摩地域がどのような変貌を遂げてきたのかをさぐる「二〇世紀の多摩」です。

特集をまとめるにあたって、一昨年頃から多摩地域の近現代史に関心を持つ5人が集まりました。メンバーは梅田定宏氏（東海大学菅生高校）、鈴木浩三氏（東京都職員研修所）、天野宏司氏（巣鴨学園）、金子淳氏（多摩市文化振興財団）、保坂一房（たましん地域文化財団）です。

ほぼ月1回のペースで会議を開き、限られた期間、限られた『多摩のあゆみ』の紙数で、20世紀の多摩の変貌ぶりをどのような視点から取り上げるのか、いろいろなスタイルを想定して議論を重ねてきました。その結果、まとまった編集方針は次のとおりです。

- ①現在の私たちをとりまく身近な暮らしを基点にして、過去にさかのぼるとどうだったのか、その移り変わりに注目する。
- ②第二次大戦後、とくに高度経済成長後の多摩地域の変貌は決定的に重要であると認識し、先行研究が少ないながらも出来るだけ事例を

取り上げる。

- ③地域の歴史に関心をもつ市民の方が手軽に読める本誌の性格を堅持し、平易な表現で叙述する。
- ④取り上げる項目について読者がより深く興味をもてる関連史料や図版・写真、統計表などを掲載する。

このような編集方針のもと、5つの柱を立てて構成しました。「多摩・東京・首都圏」（梅田）、「住宅・団地・ニュータウン」（金子）、「ガス・電気・水道」（天野）、「産業・金融」（鈴木）、「教育・文化」（保坂）。5人の問題関心から取り上げる内容や叙述の仕方にも違いがみられ、どれだけ20世紀の多摩に関してその実相をあきらかにできたのか心もとない限りです。本誌を材料のひとつと考えて、身近な歴史に興味をもつ方と一緒に地域学習を实践する博物館学芸員や学校の先生方へ、ご覧いただければ幸いです。

本誌第81号に創刊号～第80号の目録が収載されています。第81号～100号までの目録は、第101号（今年2月発行）に収載しました。「特集一覧」「目次一覧」「執筆者別論題一覧」です。第81号とあわせてご利用ください。

平成12年4月、社会教育課文化財係が一部を残して郷土資料館と統合され、本館にも新しいメンバーが加わった。文化財行政の慣れない業務に戸惑いながらも、新たな可能性に胸膨らませながらのスタートの年であった。

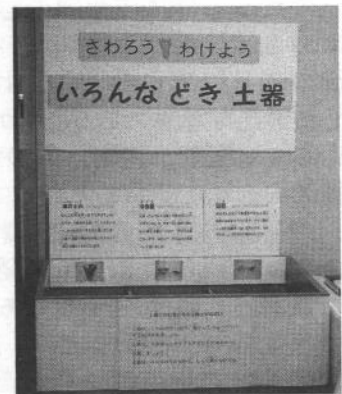
そのような中で、展示普及活動においても初めての試みがなされた。最初の試みは5月に新設したハンズオン展示コーナー「さわろう・わけよう・いろんなどき・土器」である。

以前から、展示品にさわられるコーナーをつくりたいという議論はあった。社会科見学や体験授業などで訪れる子供たちが「本物の道具」に対して見せる関心は、我々大人の想像をはるかに超えるものであり、ハンズオン展示の開く可能性に十分な手ごたえを感じていた。しかし貴重な資料の損壊・紛失の危険と背中合わせのハンズオン展示。躊躇もあった。

「とにかくやってみよう」の精神で、まず手作りの展示台を準備。そこに土器・須恵器・磁器の3種のやきものの破片を混ぜておき、その違いを実際に触って確かめながら、分類して

るというコーナーとした。現在までのところ、グループ見学の小学生たちなどが時々利用しているが、知名度も低く、十分に活用できていない。館側の「仕掛け作り」の工夫も足りないように思われる。今後は内容の再検討も含め、利用度を高める工夫をしていきたい。

資料が「本物であること」の存在感は、何ものにも替えがたい博物館の特質であり、博物館が博物館であるための原点だと最近改めて考えさせられている。たとえどのように優れたデジタルミュージアムが実現しても、「モノと人が出会う場所」としてのあらゆる可能性を、博物館は誇りを持って追いつけるべきではないだろうか。ハンズオン展示を通じて、そんなことを考えている。



狭山丘陵市民大学

東大和市立郷土博物館

平成12年度、東大和市立郷土博物館と東村山ふるさと歴史館では、来館者が狭山丘陵についてより効果的に学習ができるようにと、共催事業「狭山丘陵市民大学」を開催しました。

両館とも狭山丘陵を背景に位置し、郷土学習を進めるために資料収集、整理保管、展示、調査研究、教育普及活動を行う地域博物館です。特に教育普及活動については、両館とも工夫を凝らしています。

東大和市立郷土博物館では、プラネタリウムの一般投影・学習投影の他に天文のおはなし会を行ったり、雑木林も含めて博物館とする考えから狭山丘陵を利用した自然観察会は、年間70回を越えます。

さて、狭山丘陵市民大学の講座の内容ですが、路傍の石造物めぐり、雑木林を歩こう～里山を考える、狭山丘陵の遺跡というように、大きく3つに分けました。各テーマ2回づつ、会場は東村山と東大和で交互に行い、フィールドワークも試みました。それぞれの博物館職員が講師をし、参加されたみなさんの記録をもとに、現在報告書を作成中です。どの講座もたいへん好評で、13年度も継続することになりました。

狭山丘陵市民大学のほかにも、両館で共催、

あるいは協力して行った講座に、はじめての草木染め、自然観察会「バードウォッチング」、縄文土器を焼こうがあります。これらを通して得られた情報やデータは、博物館にとっても大きな財産となるでしょう。

今後は、狭山丘陵全体に視点を置き、埼玉県側にも足を伸ばす予定です。参加者のみなさんと楽しく学習をしていきたいと思っています。

また、将来的には狭山丘陵をとりまく市町の博物館が連携しあって、企画展示や調査研究なども行っていければと、夢見ています。



狭山丘陵市民大学「路傍の石造物めぐり」の風景

年間入場者数が初の10万人突破

東京都高尾自然科学博物館

東京都高尾自然科学博物館は、3月10日に昭和41年の開館以来、初めて、年間（単年度）入館者数が10万人を突破しました。

本館は、都が運営する唯一の自然科学博物館でありながら、展示面積が666㎡の小規模な博物館ですが、入館者数は平成4年度の9万7千人を最高に、これまで10万人の大台を突破することはできませんでした。

しかしながら、平成9年以来、着実に入館者数を増やしてきました。このことは、平成9年度からはじまった博物館運営の新しい取り組みが都民に受け容れられてきた結果ということができそうです。例えば、平成9年度から取り組みはじめた企画展では、本館の東京の自然に関する地道な調査・研究・資料収集成果をもとに、来館者の関心のあるテーマ（「東京のクマ」「スマレ物語」「植物を描いてみよう」「ムササビ」「東京に残る原生林」）を設定し、写真・剥製などを用いた展示・解説を行なってきました。現在、7月からの企画展「モミをとりまく生きもの」の開催に向けて着々と準備を進めています。また、年2回特別展（現在「沢の生きもの」）を開催しています。是非、見に来て下さい。

企画展に並ぶ主催事業として自然観察会を年14回程度、自然講座を年4回開催し、平均して応募が定員の2倍を超える人気があります。

さらに、最近では学芸員の学校への出前授業をはじめ、プールの水生昆虫などの学校教育支援や、未就学児から小中高校生、学校の先生まで自然体験ができるプログラムを実施するなど、子供たちの自然体験学習に力を入れています。

10万人直前の江東区在住の吉村創君（9才）は、以前博物館を利用した甲府に住むおばあちゃんに連れられて、来館されました。「子供たちに東京の自然をわからせるのにとってもいい博物館で、じっくり本物の標本を見せながら自然のことを教えていきます」と語ってくれました。

10万人目の相模原市在住の太田勝栄さん（35才、会社員）は、「初めて博物館に来ました。東京の動植物の様子がとても丁寧に解説されていると思いました」語り、10万人目の栄誉に驚いていました。

今後も来館者に「東京の自然への感動」を与えられる博物館として精一杯頑張っていきます。

建造物の復元見送りと事業の転換

江戸東京たてもの園

江戸東京たてもの園では平成12年度の事業について振り返るとともに、本年度の目玉である特別展について述べていきたい。

本年度のたてもの園は、新規収蔵建造物復元の見送りから始まった。開園以来例年1～2棟の建造物を復元し、35棟の復元計画を目的としてきた当園として、この見送りは大きな痛手となった。リピーターの声には「来るたびに新しい建物があり新鮮だ」というものが多く、今年度はこれに変わる代替策として、普及事業の強化に焦点を合わせた。新規の事業として、これまで行ってきた園内建造物の展示解説を一步深め、解説時間を延長したたてもの園ツアーを5回、また導入部分を利用して、小金井市の懐かしい風景を撮影した写真展も行った。これらの事業は実験的なものであるが、来園者には比較的好評で、次年度以降の足掛かりとなった。

近年話題になっている「総合的な学習」に基づいた博学連携事業については、市内や近隣市の学校に呼びかけを行い、小学生を中心に江戸時代から近代までの生活（特に住の部分）を体

験してもらった。こちらも今年度始めたばかりであり、軌道に乗せるには相当な時間を要すると思われるが、いずれにせよ来園者が来て良かったという感想を持ってもらえるような事業を考えていかなければならない。

次に特別展であるが、江戸東京たてもの園では開園以来、毎年春先に特別展示を行ってきた。内容は収蔵建造物に関連した展覧会、あるいは多摩地域に焦点を当てたものを行った。本年度3月から開催予定の「宇和島藩伊達家」展は主に前者にあたり、当園で収蔵する伊達家の門の寄贈者である宇和島伊達氏の資料を中心に展示するものである。屋敷の図面・間取り図や古文書などからは江戸時代の大名屋敷の様子を、伊達家に残る生活用品からは大名の暮らしぶりをと、建築と歴史の両方の視点から江戸時代の支配者の様子を見据えるような展示を考えている。

冒頭に述べたように今年度の事業計画は例年と異なった形で始まったが、当園の今後を考えるに当たっては、事業を見直す良い機会ともなったことも挙げておきたい。

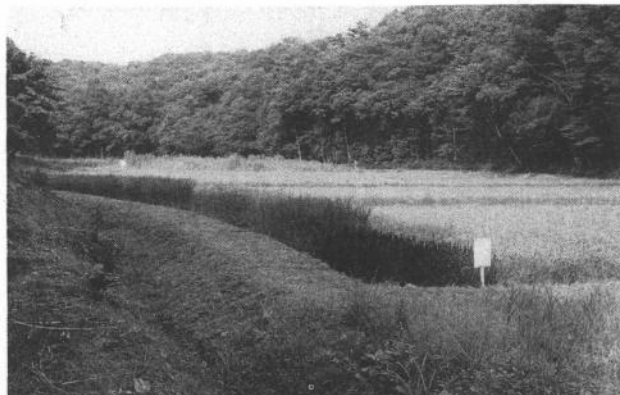
赤米栽培を館事業に生かすための試行

武蔵村山市立歴史民俗資料館

当館では5年ほど前から来館者への緑のサービスという程度の気持ちで糯米の「満月」という種類の稲のプランター栽培を行ってきました。3年前、縁あって武蔵村山市史民俗編に携わる長沢利明氏から日本在来種の赤米3種類の種籾を分けていただきました。その3種類とは「岡山県総社の国司神社の赤米」・「長崎県対馬の多久頭魂神社の赤米」・「鹿児島県種子島の宝満神社の赤米」であり、いずれも草丈が130cmを越え、芒が長く、色も通常の稲とは違い人目を引きつけます。この赤米のプランター栽培が成功し、種籾がある程度の量穫ることができたことから何とか館事業に生かそうと考え、市報で公募し、プランター栽培による赤米栽培友の会を結成し、種籾の配布を行いました。会員にはなるべく毎月発行する栽培マニュアル「赤米通信」を直接取りにきてもらい、栽培状況の報告を受け、翌月の「赤米通信」に会員だよりとして掲

載しました。このほか、東京都立野山北・六道山公園内にある里山体験施設の水田にも赤米、黒米の種籾を分け、栽培してもらいました。

昨年はすり鉢と箕を使い、脱穀、調整した赤米の試食会を行い、今年は餅つきと一緒に赤米の試食を行います。



野山北・六道山公園内の水田に植えられた赤米・黒米

耕心館土蔵展示

瑞穂町社会教育施設耕心館

平成12年11月10日、瑞穂町町政施行六十周年を期して仮開館された耕心館は、瑞穂町の新しい社会教育施設として今後多様な活動を計画しています。

耕心館は、瑞穂町駒形富士山の旧細瀧家を瑞穂町が取得・整備し、その旧宅を社会教育施設、土蔵を博物館的施設として位置付けています。

土蔵は江戸時代末期の築造になる衣装蔵で、町に残る数少ない有形文化財として公開し、旧蔵の衣装関係の資料、近代以降家業とした醤油醸造業関係の資料、ならびに細瀧家伝来の文書等を展示しています。

文書の目録は現在コンピュータによるデータベースを作製中ですが、大別しますと、江戸時代寛永年間以降の名主関係の近世文書と、明治時代以降の戸長および村長関係の近代文書が中心で、その他に旧細瀧家の家業関係文書や個人的記録が含まれています。その数は、現状のこより綴じされた明治期行政資料を各一点として数えて約2,000点となっており、綴じを個別に分別しますと総数5,000点を超えると思われれます。

近世文書としては、各種の証文・請状・帳・届・願・覚・記など地方文書の主要な類型をほぼもれなく含み、今後精細な調査と研究を予定しています。

近代文書としては、明治十年代に政府から布達された行政関係の文書が中心ですが、そこに郡役所・村役場等の行政資料も含まれ、その内容は多彩なものとなっています。

その全体は近年注目され始めた近代資料として極めて良質のものと思われれます。多量な財政戸籍関係の資料はもとより、明治初期の近代的な地方自治確立のためになされた、選挙・議会教育・警察・消防・医療・軍隊・測量・啓蒙などの資料を含んでいます。

また近世からの各種絵地図、明治期の地券、昭和初期の株券、商業広告・暦・おみくじなどは、視覚資料としても重要と思われれます。

家業として営まれた醤油醸造業関係の樽・甕・絞り袋・白衣・仕込帳・大福帳などは地域に根ざした近代製造業の容貌を彷彿とさせます。

耕心館は、平成13年4月に正式開館し、町の郷土資料館と緊密な連携を取りながら、調査研究と展示公開を図っていく予定です。

瑞穂町社会教育施設「耕心館」

所 管 瑞穂町教育委員会社会教育課社会教育係

所 在 瑞穂町大字駒形富士山317番地 1

電 話 042-568-1505

F A X 042-568-1506

特別展「環境にやさしい繊維展」開催

東京農工大学工学部附属繊維博物館

平成12年11月8～12日の5日間、第55回特別展として「環境にやさしい繊維展」を開催しました。

科学技術の進歩発展は人類の生活をより便利に、より快適にと大きく変えましたが、一方でわれわれの住む地球の環境を悪化させるようにもなり、このまま進めば人類の存続も危惧される状況におかれています。そこで現在の科学技術に最も求められているのは、進歩を止めればよいのではなく、技術の進歩と環境の保全を如何に調和していくかにあります。

繊維は衣服素材として「人にやさしい」性能は必要不可欠のものです。最近ではさらに積極的に環境の悪化を防ぐ役割が大きく期待され

ている分野です。

そこでこのたびは日本化学繊維協会、生分解性プラスチック研究会の協賛により地球環境の保全・浄化に活躍する“ハイテク・ファイバー”をとりあげました。自然界の微生物によって分解される生分解性繊維や大気・水・土壌等における有害物質の除去・浄化に使われる繊維、省資源・省エネに役立つ高強度繊維などに関心が集まりました。

また容器包装リサイクル法の完全施行で身近になったPETボトルのリサイクルについては、PETボトルの回収からリサイクルの過程、リサイクル製品を分かりやすく展示し、好評を得ました。

奥多摩水源地ふれあいフェスティバル

奥多摩水と緑のふれあい館

去る9月15日、秩父多摩甲斐国立公園指定50周年記念事業の一環として当館を含む小河内ダム周辺地域において、奥多摩水源地ふれあいフェスティバルが開催されました。当日は、館内では小河内の鹿島踊、川野の獅子舞及び山梨県丹波山村のささら獅子舞が上演され、前庭においては奥多摩清流太鼓と山梨県小菅村大菩薩御光太鼓の競演が行われたほか交通安全パレードなどいろいろなアトラクションが行われ、大勢の観光客の方々に賑わいました。また、夜7時30分より第2部として西暦2000年を記念した都内唯一の2尺玉を含む花火が打ち上げられ、去り行く夏を惜しんでいました。今回の試みは伝統文化を通じて都市住民と山村住民とのふれあいと水源地のPRを目的に行われたものです。当日は、2,851名もの方々が入館され大いにその目的が達成されたことと思います。今後も機会を捉え、こうした試みをしていく予定です。

また10月22日には入館者累計が50万人を突破し、記念セレモニーを行いました。約1年11ヶ月での50万人達成は予想外の速さでした。奥多摩町随一の観光スポットに位置する立地条件と新しい建物であるという物珍しさが大きな要因だと思います。今後は、より多くのリピーターに入館していただくよう内容の充実に努めたいと思います。

このほか今年度は奥多摩町誌資料集第18集「田草川家文書4」を刊行いたしました。



開館13年目を迎えて

檜原村郷土資料館

当館は、昭和63年開館以来12年が経過しています。常設の展示品、映像機器等も一部を改修したものの、そのほとんどが開設当初と同じ状況にあります。郷土芸能を紹介するレーザーディスクライブラリー、檜原村と歴史を紹介するマルチスライドや展示写真等も年数の経過に伴い老朽化し、更新の時期にきています。

入館者についても、開館当初は年間20,000人台であったものが年々減少し、平成12年度には6,000人台になると予想しています。

そこで当館では、12年度事業として館内の展示写真、マルチスライド用の写真撮影を行って

いますが、来年度は、常設展示品の展示替え、映像機器の整備、途絶えている特別展の開催などを計画し、PRにも留意し、利用者増を図って行きたいと考えています。

又、村の文化財専門委員会との協力により、失われつつある旧形態を残す民家（明治以前より養蚕業のための構造を残すもの）の調査を平成10年度より実施していますが、12年度で約120戸の民家の調査を終える予定になっています。来年度はこれをまとめ、歴史ある民家の調査書として当館に保存し、後世に伝えて行きたいと考えています。



東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿

館名	所在地	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武線東村山駅徒歩10分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	0426-22-8939	JR八王子駅または京王線京王八王子駅からバス
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	JR府中本町駅またはJR・京王線分倍河原駅徒歩20分
町田市立博物館	町田市本町田3,562	042-726-1531	JR・小田急線町田駅からバス
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅駅徒歩20分
調布市郷土博物館	調布市小島町3-26-2	0424-81-7656	京王線京王多摩川駅徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-557-5614	JR箱根ヶ崎駅徒歩18分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR奥多摩駅からバス
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR牛浜駅徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール上北台駅からバス
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920-1	042-596-4069	JR武蔵五日市駅徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR羽村駅徒歩20分
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	0424-93-8585	西武線清瀬駅徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR立川駅または多摩モノレール立川南駅前からバス
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR武蔵五日市駅からバス
日野市ふるさと博物館	日野市神明4-16-1	042-583-5100	JR日野駅徒歩12分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR武蔵小金井駅徒歩25分, JR東小金井駅徒歩20分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR矢川駅徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈袋橋1-260-2	042-567-4800	西武線東大和市駅からバス
バルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	小田急線・京王線・多摩モノレール多摩センター駅徒歩5分
東京農工大学工学部附属繊維博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR東小金井駅徒歩9分
東京都高尾自然科学博物館	八王子市高尾町2436	0426-61-0305	京王線高尾山口駅徒歩4分
東京都井の頭自然文化園	武蔵野市御殿山1-17-6	0422-46-1100	JR・京王線吉祥寺駅徒歩10分
江戸東京たてももの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR武蔵小金井駅からバス
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR国立駅前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR御嶽駅徒歩20分

ミュージアム多摩 No.22

発行：東京都三多摩公立博物館協議会

編集委員：立川市歴史民俗資料館

会長 日野市ふるさと博物館館長

檜原村郷土資料館

〒191-0016 東京都日野市神明4-16-1

小金井市文化財センター

電話 042-583-5100

日野市ふるさと博物館